2023.6.1

現代俳句千葉

149号

巻頭エッセイ

強化部の宿題

副会長　髙橋宗史

小学二年の平凡な坊主の目にも御目麗しい先生だった。けれど彼女は厳しい先生でもあった。ある日私は宿題をして行かなかった。案の定、居残りとなりなかなか帰してくれない。仲間を一人残して私は教室から脱走した。

さて、千葉県現代俳句協会の宿題。癖があるからと言って今は回顧の時ではない。私達千葉現俳の前会長秋尾敏氏が『現代俳句』四月号に「座の文学の再構築」という評論を発表されているが、皆さん読まれたことと想う。そこでは俳句の過去、現在、未来を視野にして今何をすべきかを示唆していた。重要な示唆なので少々長くなるが、復習しておきたい。

論文は、「一　座の力」で始まり「八　世界文学の座へ」で結んでいる。ここでは「一」の内容を確認しておく。江戸時代に俳諧が広がった理由として、先ず連歌で「誰かが五七五と書けば他の誰かが七七と付ける。そこに内面と内面が響き合う奇跡の空間が作られていった」とし、重要なことに俳諧では日常の俗語、「自分の言葉」で自分の「発想（アイディア）」を示すようになった。そして俗世間の価値観を離れ内面の価値観で心を満たし始めたと述べ、次のように「一」を結んでいる。「生活のための時間を離れて自らの内面を拡充し、そこで他者と繋がりあうという経験は、現代においても重要なことである。そうした内面の傾城こそが社会を相対化し、生きることの理想を生み出していくからである」。

昨令和四年八月、千葉現俳は青年部を創設した。強化部はそのことに関わった。青年部はすでにインターネット句会を二回実施し、吟行を実施、リアルの句会も模索中とのこと。また、恒例の千葉現俳俳句大会は昨年度第一回「高校生の部」を設けたところである。現並木会長の思いが実践に移されたと言え、そこには図らずも？　変革に繋がるかと想像される若々しい作品が生まれている。

理論を具体化するのは時代状況がどう変わろうとも俳句を担う主体の実践のほかにないと思われる。強化部は俳句を通じて秋尾氏の言う生きることの理想を求め「脱走」は坊主に任せて二つの方法を実践したいと思う。一つはチグリス・ユーフラテス文明のもたらしたパピルスの文化を堅持すると共に千葉現俳青年部がすでに実施しているモダンな機器を駆使する文化を併せ持った行動をとることである。具体的な案として各研究句会の組織にも目を向けた見直しの提案を考える。

目　次

強化部の宿題　髙橋宗史 …… 1
令和五年度定期総会 …… 2～3
令和五年度俳句大会 …… 4～5
春の吟行会 …… 6～7
諸家近詠 …… 8～9
千葉を詠む …… 10
私の感銘句 …… 11～12
津田沼研究句会報告 …… 13
青葉研究句会報告 …… 13
柏研究句会報告 …… 13～14
君津研究句会報告 …… 14
強化部だより・図書紹介 …… 15
会員・会友の近況 …… 15～16
掲示板 …… 16

千葉県現代俳句協会会報

令和五年度定期総会・俳句大会開催

令和五年三月十九日、千葉市文化センターにおいて令和五年度定期総会・俳句大会が四年ぶりに開催された。羽村幹事長の総合司会で、午前十時三十分に始まり、髙橋健文副会長の開会の辞、並木会長の挨拶に続き、坂間恒子氏を議長に選出。総会は会員参加者四十四名、委任状一六二名で定足数を満たした。

来賓に現代俳句協会副会長筑紫磐井氏、東京都区副会長佐怒賀正美氏、神奈川県会長尾崎竹詩氏の三名の方々をお迎えした。

定期総会

総会では六議案について審議され、いずれも可決。長井副会長の閉会の辞を以て終了した。

下村洋子俳句大会実行委員長

並木邑人会長

来賓・顧問の方々

新会員　篠田京子さん

会場風景

〔第１号議案〕

令和４年度事業報告

1．行　　事

(1)　定期総会・俳句大会

①　令和４年度総会　３月２０日（日）新型コロナ感染予防のため中止
千葉市文化センター　（書面決議により可決）

②　同上　　俳句大会　　同上　　中　止
（郵送にて事前投句の部表彰）

(2)　吟　行　会

春の吟行会　　４月２１日（木）　　参加者　41 名
吟行地：市川市立万葉植物園　会場：船橋市勤労市民センター

秋の吟行会　　10 月 30 日（日）　　参加者　67 名
吟行地：習志野市谷津バラ園と谷津干潟　会場：船橋市勤労市民センター

(3)　研 究 句 会

①　津田沼研究句会
毎月第２火曜日　13 時～16 時
津田沼１丁目町会会館（２句事前投句）　12 回（内、通信２回）実施

②　青葉研究句会
毎月第４木曜日　13 時 30 分～16 時 30 分
千葉市民会館（３句事前投句）　12 回（内、通信５回）実施

③　柏 研 究 句 会
毎月第２土曜日　13 時～17 時
柏市・ハックルベリー書店２階（当日投句）　11 回（内、通信３回）実施
８月休み、10 月野田市コウノトリの里吟行

④　君津研究句会
毎月第１木曜日　13 時 30 分～16 時 20 分
君津市生涯学習交流センター（３句事前投句）　12 回（内、通信４回）実施

2．幹 事 会 等

定例幹事会
第１回　　１月 25 日㈫　船橋市勤労市民センター
第２回　　５月 24 日㈫　同上
第３回　　８月 23 日㈫　同上
第４回　　11 月 22 日㈫　同上
臨時幹事会　４月　８日㈮　同上

3．会報の発行

第 144 号（３月１日刊）
第 145 号（６月１日刊）
第 146 号（９月１日刊）
第 147 号（12 月１日刊）

4．会 員 数 等（令和４年 12 月 31 日現在）

会員　276 名　会友　28 名　　計 304 名

【主な異動】

入　会　21 名
新会員（13 名）川守田美智子・鳥取　芳子・安井　三緒・陸野　良美
柴田　洋吾・石　　尽・大喜　京香・立神　作造
石井　恭平・篠田　京子・小門　則子・長島　廣忠
野川　　京
転入会員（２名）渡部　　健・八島　岳洋
新会友　（６名）浅見美代子・金田めぐみ・村田　満枝・栗原　正子
横山　郁子・渡辺しげ子

退　会　26 名（会員　23 名　　会友　３名）
内、物故者　（会員７名）
菊地　京子・清水　重陽・田中つとむ・細野　一敏
入部　和夫・高田　柴秋・横須賀洋子

5．そ の 他

青年部の新設（８月 23 日の定例幹事会）

〔第２号・第３号議案〕

令和４年度の会計報告

［令和４年1月1日～12月31日］

収 入 の 部

(単位：円、%)

科　目	予算額 (a)	決算額 (b)	対比(b)/(a)	摘　要
俳句大会	555,000	489,000	88%	事前投句の部のみ実施
吟行会	100,000	108,000	108	春・秋２回
協会運営	580,000	606,732	105	本部よりの助成金、会友費
合　計	1,235,000	1,203,732	97	

支 出 の 部

(単位：円、%)

科　目	予算額 (a)	決算額 (b)	対比(b)/(a)	摘　要
総　会	230,000	91,932	40%	中止
俳句大会	355,000	339,468	96	事前投句の部のみ実施
吟行会	100,000	86,413	86	春・秋２回
会報発行	535,000	516,406	97	年４回
協会運営	280,000	227,694	81	定例幹事会４回他
強化部	50,000	20,106	40	青年部発足
予備費	150,000	0	0	
合　計	1,700,000	1,282,019	75	

次年度繰越金

(単位：円)

当年度収支差額	－78,287
前年度繰越金	1,616,912
次年度繰越金	1,538,625

財 産 目 録

(単位：円)

普通預金	1,358,092	千葉銀行稲毛東口支店
現　金	180,533	会　計 (89,226) 吟行会 (60,857) 事務局 (556) 強化部 (29,894)
合　計	1,538,625	

監査報告書

令和４年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

令和５年１月２４日

監査役 矢野忠男

監査役 矢野康子

〔第４号議案〕

令和５年度事業計画（案）

1．行　事

(1) 定期総会・俳句大会

① 令和５年度総会　３月１９日(日)　千葉市文化センター

② 同上　俳句大会　同上　同上

（高校生の部新設）

(2) 吟　行　会

春の吟行会　４月２９日（土）

吟行地：中山法華経寺界隈　会場：船橋市勤労市民センター

秋の吟行会　未定

(3) 研究句会

① 津田沼研究句会　毎月第２火曜日　午後１時より　津田沼１丁目町会会館（２句事前投句方式）

② 青葉研究句会　毎月第４木曜日　午後１時30分より　千葉市民会館　（３句事前投句方式）

③ 柏研究句会　毎月第２土曜日　午後１時より　柏市ハックルベリー書店（当日投句方式）

④ 君津研究句会　毎月第１木曜日　午後１時より　君津市生涯学習交流センター（３句事前投句方式）

2．幹事会等

定例幹事会

第１回　１月２４日(火)　千葉市民会館

第２回　５月２３日(火)　船橋市勤労市民センター

第３回　８月２２日(火)　同上

第４回　11月21日(火)　同上

3．会報の発行

第148号　（３月１日刊）

第149号　（６月１日刊）

第150号　（９月１日刊）

第151号　（12月１日刊）

4．その他

千葉県現代俳句協会主催　初心者俳句講座

４月15日(土)　開講　月１回　千葉市生涯学習センター

〔第５号議案〕

令和５年度予算（案）

［令和５年1月1日～12月31日］

収 入 の 部

(単位：円)

科　目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘　要
俳句大会	555,000	555,000	489,000	事前投句 当日席題
吟行会	100,000	100,000	108,000	春・秋２回
協会運営	600,000	580,000	606,732	本部助成金 会友費
合　計	1,255,000	1,235,000	1,203,732	

支 出 の 部

(単位：円)

科　目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘　要
総　会	250,000	230,000	91,932	
俳句大会	420,000	355,000	339,468	事前・当日投句 高校生の部
吟行会	100,000	100,000	86,413	春・秋２回
会報発行	550,000	535,000	516,406	年４回
協会運営	300,000	280,000	227,694	
強化部	30,000	50,000	20,106	会員増強 青年部
予備費	100,000	150,000	0	
合　計	1,750,000	1,700,000	1,282,019	

次年度繰越金

(単位：円)

当年度収支差額	－495,000	－465,000	－78,287
前年度繰越金	1,538,625	1,616,912	1,616,912
次年度繰越金	1,043,625	1,151,912	1,538,625

〔第６号議案〕

役員の補充について

新任幹事　松村　五月　任期：令和５・６年度

令和五年度 俳句大会

後援　千葉県教育委員会・千葉市・
毎日新聞社・千葉日報社・
朝日新聞社千葉総局

席題の部の俳句大会に先立ち、事前投句の部と、今回より新設された高校生の部の表彰が行われた。

席題の部は、午後一時に徳吉副会長の開会のことばで開始された。参加者は来賓の三氏を含め五十六名。披講は越野幹事・白木幹事・星野幹事が担当。進行は講評・表彰を含めて予定通り進み、木之下副会長の閉会のことばで終了した。

俳句大会の成績は左記の通り。

【事前投句の部】

〈入賞者作品〉

●千葉県知事賞

象を見て象に見られて文化の日　塩野谷　仁

●千葉県現代俳句協会賞

誰か手をつないで欲しい捨て案山子　泉　志眞子

●千葉市長賞

寒波来る遠近法でやってくる　徳吉洋二郎

●毎日新聞社賞

風船葛いつまでも放課後　中嶋　三雄

●優秀賞

人間に背中がありて秋の風　長濵　聰子

冬瓜が来て半日を棒に振る　加藤　法子

夕刊をはみ出している残暑かな　徳吉洋二郎

夕焼はうしろ姿がよく似合ふ　髙橋　健文

そうだよね居ないんだよね日向ぼこ　加藤　法子

デコポンを一つ重しに置手紙　神作　仁子

●秀　逸

星月夜地球という名の座礁船　長濵　聰子

鳥帰る戦の臭いする方へ　青木　一夫

落椿こわれてしまう水鏡　坂間　恒子

われもまた可燃性なり櫨紅葉　浪岡　玄

この国の真ん中にある敗戦忌　山本　敏倖

過去未来空っぽにして柚子の風呂　前田　孝子

叩かれて太りゆく野火ウクライナ　重田　忠雄

狼の着信履歴まだ消せない　羽村美和子

定型詩になるまで飛行月の雁　羽村美和子

日向ぼこして太陽の色になる　日髙　秋龍

●佳　作

どこから見ても目の合う遺影雪つもる　山中とみ子

原爆忌睨みのきいた目玉焼　山中とみ子

空き缶を蹴り少年の夏終わる　徳吉洋二郎

八月の空の重さを昭和という　徳吉洋二郎

さくらんぼ揺れているのは地球です　徳吉洋二郎

鶏頭花墓標のように立っており　坂間　恒子

本箱は私の花壇日脚伸ぶ　石井紀美子

煮凝りを崩せば遠く戦あり　青木　一夫

雨の日は雨のいろなり冬桜　髙野　春子

台所に戦車が映る大晦日　加藤　法子

手も足も遠くにありて昼寝覚　下村　洋子

黙祷によろめく齢終戦日　大薗　智子

雪の夜のずんずん重くなる地球　尾崎　竹詩

故郷は母の居てこそ水温む　原　正治

神のもの神に帰して熊祭り　木之下みゆき

少年の鍵束オリオンへ研　安田　政子

【高校生の部】

〈入賞者作品〉

●千葉県現代俳句協会会長賞　柏中央高

届くかなリモート祈願初詣　近藤　昇輝

●俳句大会委員長賞　柏中央高

大そうじこんなところに思い出が　齊藤　花梨

●俳句大会実行委員長賞　鎌ヶ谷高

秋空や遠く響いた応援歌　久保日茉理

【席題の部】　席題「青」「桜」

〈入賞者作品〉

●千葉県現代俳句協会会長賞

青春は陽炎余生は切り株　尾崎　竹詩

●千葉県教育委員会教育長賞

空っぽの時間につもる桜蕊　星野　一惠

●千葉日報社賞

傷口がいまだ酸っぱい朝桜　石井紀美子

●朝日新聞社千葉総局賞

省略のできないあなた桜降る　松村　五月

〈特別選者特選句〉

（並木邑人特選）

菜種梅雨歯科の待ち合い室青し　泉　志眞子

（筑紫磐井特選）

この頃はゆっくり急ぐ桜かな　山﨑　幸子

（佐怒賀正美特選）
夜桜を昼に見ている爛熟期　平岡　育也
（尾崎竹詩特選）
逢魔時の動くものなし桜満ち　髙橋　健文
（秋尾　敏特選）
たい焼は海に飛び込む初桜　池田　幸
（塩野谷仁特選）
夕桜地はかなしみの地雷原　大見　充子
（高木一惠特選）
夕桜地はかなしみの地雷原　大見　充子
（武田伸一特選）
指切りで終るつもりや夕桜　泉　志眞子
（木之下みゆき特選）
天蓋の桜にまみれ一度死ぬ　下村　洋子
（髙橋健文特選）
天蓋の桜にまみれ一度死ぬ　下村　洋子
（髙橋宗史特選）
ボタン有る学生服の春青し　宮原　青佳
（長井　寛特選）
空っぽの時間につもる桜蕊　星野　一惠
（徳吉洋二郎特選）
空襲で燃えた桜が立っている　吉田　耕史
（羽村美和子特選）
傷口がいまだ酸っぱい朝桜　石井紀美子
〈五～二十位入賞者作品〉
空襲で燃えた桜が立っている　吉田　耕史
桜吹雪からくり時計狂れており　池田　博臣
火縄銃いくつ隠してさくらの夜　塩野谷　仁
突き詰めて青いインクとなる春愁　秋尾　敏
指切りで終るつもりや夕桜　泉　志眞子
一面菜の花青春どっとなだれ込む　羽村美和子
春愁や青を貪る巨大都市　越野　雄治
青残る二色鉛筆春休み　遠藤　寛子
囀りの青い残像ゴッホの眼　徳吉洋二郎
梁は母柱は父や青嵐　神作　仁子
存分に生きてまだまだ青き踏む　長濵　聰子
この頃はゆっくり急ぐ桜かな　山﨑　幸子
桜咲き飲んではならぬ不老不死　長井　寛
地の塩の青むや春の悲しみに　高木　一惠
天蓋の桜にまみれ一度死ぬ　下村　洋子
妬心ともちがうはがゆさ桜の湯　鈴木　瑩子
〈その他の作品〉
青き踏む瓦礫の山と放射能　矢野　忠男
わがいのち常に見てゐる桜かな　岡田　春人
着古した青のジャケット風光る　増田　豊子
卵白に指先ぬらす桜の夜　坂間　恒子
シャガールの馬と遊んだ夕桜　木之下みゆき
青嵐全力少年青を抱く　森井美惠子
初桜我は使わぬ「や」「かな」「けり」　東　國人
バス停を降りて見上げる朝桜　伊与田すみ
母たちの涙か青いカーネーション　川上　典子
再会の指きり淡く夕ざくら　野口　京子
剥片にとどまる俳句青き踏む　並木　邑人
透過する青の波長はゆるやかに　白木　暢子
桜だより日本中が胡椒ひく　松本　千花
空青し行ったり来たり春の神　小林　昌子
磯遊び昔のままの青き空　中嶋　三雄
靖国の桜の言葉聞いている　篠田　京子
傷つくを怖れず辛夷青空に　髙橋　宗史
羊の眼青空映し四月来る　三宅たくみ
チェーホフの筆追いつかぬ初桜　置鮎　隆一
ドローン来る桜に埋まる瞳かな　置鮎　勝美
木の芽青止血確かな絆創膏　片岡伊つ美
子規虚子に青春の詩木々芽吹く　筑紫　磐井
うららかや青い胸底波が巻く　佐怒賀正美
夕桜城跡にある馬隠し　加藤　法子
うりずんやときに青空ときに石声　小林　実
兜太いて彼岸の青き夕日かな　武田　伸一
年下の父母の写真や桜舞ふ　渡辺しげ子
我がものと思いし桜五輪咲く　髙橋　博
八十路にも青き草恋う海を恋う　川島　里子
朝桜空にひろげる緋毛氈　横山　郁子
今生の今日の桜にモノローグ　安田　政子

句会風景

事前投句の部入賞者
（左より：敬称略）
徳吉洋二郎・泉志眞子・
並木会長・塩野谷仁

席題の部入賞者（左より：敬称略）
石井紀美子・尾崎竹詩・
並木会長・星野一惠・
松村五月

席題の部一位
尾崎竹詩神奈川県現俳会長

春の吟行会
文人たちの愛した「中山法華経寺界隈」

会場　船橋市勤労市民センター　令和五年四月二十九日（土）

祖師堂と本堂を繋ぐ廊下

折しも翌日は荒天との予報が出ているその前日。白雲の流れはいささか速く、日向は初夏の訪れ、日陰は春の名残が感じられる、まさに季節の変わり目を実感できる陽気となった。

十時に京成中山駅に集合。駅前の店の裏窓からは団子を焼く香ばしい匂い。門前町の風情が電車を降りた途端、五感を刺激してくる。

焼だんご買い夏兆す山門へ　野口京子

駅から間もなく、総門、仁王門をくぐりぬけ、個性豊かな子院の点在する参道を歩むこととなる。桜並木はすっかり葉を茂らせそこここに可愛らしいサクランボを実らせている。

やつかいな自尊心なり桜の実　岡田春人

中山法華経寺は鎌倉時代に建立された日蓮宗大本山寺院であり、建造物の多くは重要文化財に指定されており、境内の鬼子母神は子育ての神として広く信仰を集めている。

鬼子母神に南風鬼は外は禁句　並木邑人

祖師堂の化粧直しや桜蕊　なかもと淑子

重要文化財の五重塔、祖師堂を眺めつつ足を進める。宝殿門をくぐると、すっかり人気が少なくなり、鳥たちの囀りと葉を茂らせた大樹のざわめきに満ちた緩やかな坂が続く。木洩れ日が心地よい。思わず頭上を仰ぎ、足を止め、静寂に身を委ねる。

青葉青葉青葉荒行の風か　久野康子

解脱とは同化すること若葉風　山口　明

午後は句会場にて、コロナ五類移行も間近に控え、実に数年ぶりに会場にて全員参加で点盛、披講、表彰まで執り行うこととなった。「選句したら解散」を続けていた状況から脱したのだ。今回の吟行会会場が大盛況となったことは言うまでもない。参加者六十八名（欠席投句者を含む）の盛大な会となった。粛々と続けられていた吟行会がまたコロナ以前の盛況ぶりを再生しつつあることを実感する一日となった。

行く春の紙垂に会員増祈願　秋尾　敏

写真撮影：森井美恵子（遠藤寛子記）

仁王門

奥の院

〔一～二十位入賞者作品〕（一句高点）

①蝶放ち給ひし大聖人の杖　中里　結
②晩春の空が天蓋法華経寺　星野　一惠
③参道の青葉若葉を歩幅とし　保坂　末子
④昼下がり黄蝶ひときわ一行詩　諸藤留美子
⑤大江坂本逝けり葉桜狂奏せよ　高木　一惠
⑥参道を手ぐし風櫛さくらの実　石井紀美子
⑦うしろから作務衣青葉を抱きに来る　木之下みゆき
⑧花過ぎの弥陀の素顔を見に行かん　山崎　政江
⑨参道におもてうらあり亀の鳴く　髙橋　健文
⑩山めぐる順に青葉の人となる　久野　康子
⑪集まって別れて明日は荷風の忌　小林　実
⑫やつかいな自尊心なり桜の実　岡田　春人
⑬黄蝶白蝶こんがらがって日蓮宗　徳吉洋二郎
⑭新緑というは天使の弾けたる　大見　充子
⑮新緑の風も入れます御朱印状　秋谷　菊野
⑯祖師堂の化粧直しや桜蕊　なかもと淑子
⑰行く春の紙垂に会員増祈願　秋尾　敏
⑱洋子なきひろき大空昭和の日　吉田　耕史

⑲生き直せそう揚羽舞う奥の院　山口　明
⑳荒行の僧の足音青嵐　小門　則子

〔特別選者特選句〕

（並木邑人会長　特選）
青葉満潮素顔が見たい鬼子母神　木之下みゆき
（高橋健文　特選）
集まって別れて明日は荷風の忌　小林　実
（高橋宗史　特選）
大江坂本逝けり葉桜狂奏せよ　高木　一惠
（徳吉洋二郎　特選）
躑躅燃ゆ阿吽の肉髻たちあがり　鈴木　瑩子
（長井　寛　特選）
緑蔭の小暗き闇に船出する　下村　洋子
（木之下みゆき　特選）
蒼然と風清明の柿葺　矢野　忠男
（羽村美和子　特選）
花過ぎの弥陀の素顔を見に行かん　山崎　政江
（秋尾　敏　特選）
蝶放ち給ひし大聖人の杖　中里　結
（高木一惠　特選）
行く春の紙垂に会員増祈願　秋尾　敏

散策中

句会風景

〔その他作品〕（二句のうち一句　順不同）

法華経寺そぞろ詠み合う昭和の日　高橋　博
許しての言葉軽きや青もみじ　渡辺しげ子
御朱印を待つ間に揺れる藤の花　白木　暢子
焼きだんご買い夏兆す山門へ　野口　京子
不自由の後の自由よ梅古木　伊与田すみ
緑陰の袖の触れあう荷風の忌　長井　寛
鬼子母神に南風鬼は外は禁句　並木　邑人
万緑のあかるいところ聖人像　小川トシ子
葉桜になりて知りたる輪廻かな　三浦　侃
塔頭の奥白きつつじの自傷かな　池田　博臣
山門の奥は渦巻く若みどり　川島　里子
奥之院へ道標あり昭和の日　三宅たくみ
春惜しむかりそめの耳こそばゆい　石井　稔
目高生れ水面の雲をかき分ける　佐藤　禎子
かきつばた諸行無常の風に揺れ　髙橋　宗史
ががんぼの一肢ひろいしとき淋し　坂間　恒子
夏来たる八角屋根と風見馬　山崎　幸子
瞑想の色褪せし像夏隣　島　隆史
春颯子の手しっかと鬼子母神　遠藤　寛子
右も若葉左も若葉秋尾敏　東　國人
影絵のごと廊過ぐ黒衣の夏行僧　伍賀　稚子
蟻穴を出づ荒行堂に古井戸に　松本　千花
緑さすあられこぼしに音たてて　森井美恵子
大揚羽魁夷の馬を誘って　羽村美和子
大畑さんの天にも昇る石鹸玉　増田　豊子
夏めくや荒行堂のうづくまる　越野　雄治
行く春のミルクのような雲流れ　高野　義康
夏つばめ螺髪をかすめゆく風は　清野　敦史
山門の生の証や蛇の衣　髙山　克己
釈迦如来松の緑の影重ね　飯島　豊
つばくらめ空に形を残しけり　加賀谷秀男
鶯の声立ち上がるさざれ石　椎名　鳳人
かきつばた人型の紙垂もっとも揺れ　山崎　公子
荒行の地とやら背を正す松の芯　田村　隆雄
若葉風魁夷の蒼と空の青　川上　典子
荒行へ挑む力を衣被　浅見　賢之
初夏の風戦なき国の蔣介石　上野　紫泉
躑躅燃えており振り返ってしまう　藤田　富江
竜天に登るごと法華経寺の階登る　安田　政子
ハッピーバースディ葉桜の半地下に　赤羽根めぐみ
どくだみの花の白さや鬼子母神　大薗　智子
風を薫らせ中山の鬼子母神　西崎　久男
深々と巨樹あり夏の影這わす　市川　唯子
春愁や視野へ反り身の石仏　山中とみ子
法華経寺御朱印にじむ夏隣　小野　功

甦った吟行会

並木　邑人

コロナ禍での時間を短縮した吟行から、三年半振りに通常の吟行会を復活させることができました。投句された一三六句から

青葉満潮素顔が見たい鬼子母神

の句を特選にいただきました。木之下みゆきさんの作品でした。日蓮を救ったとされ信仰を集める鬼子母神ですが、素顔を見たいのは誰しも想うところ。「青葉満潮」も当日の空気感を余すところなく伝えています。

諸家近詠

霜柱あれば踏みゆく通学路
頬白やこのごろとみに筆無精
まな板に柾目の通り桜鯛
裏側は見せずまどかに望の月

末廣　陽恵

湯通しの薮味を菜花目覚めたり
姿なお思いを深む秋の声
富士真白夕刻前の二番線
春の夜の漁火白む朝ぼらけ

片岡伊つ美

あらせいとう茨木のり子の感受性
御柱祭亀の子束子を買ひ忘れ
何もせぬことへの疲れ遠花火
背骨にある秋刀魚の矜持波の音

下村　洋子

訳もなく泣ける嬉しさ星月夜
明け方の釣舟草に亡夫を乗せ
鏡面に吸い込まれゆく白さざんか
青氷柱わがうすずみの肺ふたつ

小多田文子

五回目のワクチン接種冬の陣
青空を高々と上げ冬田かな
青空に届く夏野や草千里
追憶はひとりの時間小鳥くる

川上　典子

ガレットに包むはこべらせりなずな
物言いの鋭角になる寒い夜
午後五時のほの明るくて日脚伸ぶ
薄氷を探して踏んで歩く朝

多胡たかし

窓叩く小枝の先や半夏雨
秋麗や返却前の本を閉じ
湯上がりの水を一杯残る虫
寝不足の仕事始や日の出前

岡山　敦子

春の雪広場にムンクの雪だるま
コカリナの音色に寄り添ふ若葉風
畦道に野菊の花の通せん坊
冬至の朝食卓の湯気横に這ふ

島　隆史

可惜夜の動かぬ番寒雀
風花や物思いげな猫の髭
都合良く話を通す耳袋
あれこれと認知症問う春の雪

佐藤　浩子

ひとところ藪椿咲く明かるさよ
出会ひたる浴衣の僧侶同級生
白萩に風の来てゐる安息日
般若心経ふと口に出る枯野かな

小野富美子

今も待つわたしのゴドー木の葉髪
寄鍋やある日のっそり来る戦
綿虫やこの村からも少年兵
寒禽にふくらむ大樹夜の底

窪田　俊作

むすんでひらいて手の平に冬銀河
カリフラワーモノクロームな舌ざわり
木枯しがふと立ち止まるバンクシー
明明と灯れる父の日の書斎

佐藤　直子

人知れず散りて靡かぬ枯松葉
桐咲いて父は癖字の謡の本
抱きしめてやりたき主張吾亦紅
仲秋やシテの小袖の明快な

長井　寛

白雲の羊数えている遅日
ごうごうと山動かして木の芽吹く
水馬円周率を抜け出せず
太陽を懐に抱くチューリップ

高橋　節夫

大鯉の跳ねて沈没花いかだ
荒海や山城の空花吹雪
花冷や終着駅の古時計
水温む名水で打つ里の蕎麦

高橋　健文

血の巡り悪き頭や雪が降る
パスワード変へて氷の声を聴く
一本の櫂オリオンはまだ遠い
もの忘れするたび春の近づくか

徳吉洋二郎

寒波来る遠近法でやってくる
さくらんぼ揺れているのは地球です
夕刊をはみ出して来る残暑かな
八月の空の重さを昭和という

髙久　清美

裏箔の水のひかりや朝桜
桜咲く水の惑星ゆらぎ癖
うぶ毛いろの春林光りつつ目覚む
月影も洩らさぬ杜の新樹かな

川島　里子

諸家近詠

父亡くて我には見ゆる野焼の焔
蓬摘み塔見て帰る家のあり
帰雁後の生傷はひりひり乾く
卯の花月夜母が砂を噛むような

高橋　公子

ふらここにきらきらネーム揺れている
桃咲いて人が毀れる透きとおる
どこかしら彷徨に似て青き踏む
影さして蝶がひとりじゃないという

直江　裕子

猫の恋上目遣いの顔の傷
修羅の世に牧師が蒔くやからし種
梅月夜漁師の宿の炙り烏賊
ひな祭ナース詰所の薄明かり

鈴木　房州

筆下ろし秋たけなはの墨を磨る
百歳を待たうぢやないか月見豆
晩年の武具のひとつに秋薔薇
極楽は浄土のはなし花の雨

無　子

人の世に托卵のあり麦の秋
花の絵のバス平和号八月来
私のくつわ外れて肥える秋
記憶から消えない春の虹がじゃま

田沼美智子

立春やつねと変らぬ物を食ふ
蝋梅のたましい抜けてゆく香り
遺言は全て妻にと枇杷の花
着脹れて背骨が固くなってゆく

岡田　春人

弥生への発語と思う森の私語
合縁奇縁上野にこいと飛花落花
川の洲の身ごもる容して立夏
森たちの生き目を青く麦の秋

田村　隆雄

花の色問う問におわる存在感
たったひとつの地球にこぼれる花びらだ
言語道断散りどき好きの花狂い
飛花落花棲めば都の温度あり

高桑婦美子

狐火の誘いに原発再稼働
終末はボタン押すだけ兜虫
人生の午後は静かに龍の玉
満月や鳥獣戯画に事件です

鈴木まんぼう

桜どき「侍ジャパン」V得たり
花だより一時不明の「なで仏」
七重八重木々を暈して山笑ふ
大利根の蛇行に合はす揚げ雲雀

田端　重彦

日めくりを剥ぐ立春の気を流し
青柚子を擂る大きさを曖昧に
海辺の街区コスモスの空広く
鷹悠揚魚眼レンズの真青なる

杉山真佐子

寒素振りあげぼの杉の心幹へ
鳥雲に入るシェルターも墓も無し
武器頼む心濡らすや麦熟れ星
引力に乳房は任せ登高す

高木　一惠

この街は古い写真のようで雪
マスクからはみだしているあくびかな
言の葉が和紙に滲んで牡丹雪
雨だれの下に雨だれ藤の花

鈴木　一行

みちくさのあとはスキップ花胡瓜
一泊のための設え夏布団
「サッコラ」と幸の沸き立つさんさ踊り
リモートの繋ぐウクレレ星涼し

富澤さち子

幸不幸九十九折なり菜種梅雨
青嵐四股踏むように嬰歩く
愛のキス御裾分けせり春の嬰
トリャトリャと歌い踊るや春の昼

菅ノ谷文子

雨のち黄砂そして総理を撃つ男
すっぴん協会主催パーティーたんぽぽ咲く
綿虫やまばたく間もなく柩行く
父は花野より寂寥を引きずり来

武田　伸一

香りせぬ薔薇増ゆ仮想通貨の世
妹に母を託して麝香薔薇
薔薇高く咲かせ現状維持願ふ
蔓薔薇の一枝添はざる家族かな

津高里永子

花吹雪素足の仁王紅潮す
風光る笑み続けおり大黒神
麦秋となって夕日のむず痒い
黄砂来る野良着の衿が黒ずみて

戸邉　光一

千葉を詠む

流山市　多胡たかし
下総の天地にはかに雹の乱

房総半島　末廣　陽惠
紫羅欄花やさしい人に摘まれおり

谷津　片岡伊つ美
掌の谷津の静寂や木の実落つ

千葉公園　下村　洋子
古代蓮骨透けるまで見つめおり

笠森観音寺廻り廊下から　小多田文子
秋晴や山なだらかに上総の地

江戸川土手　川上　典子
菜の花の海に明日をとり戻す

市川市　佐藤　直子
初日さす波広がりて三番瀬

松戸市　岡山　敦子
下総の大地肥沃に春の雨

夷隅郡御宿町　島　隆史
御宿の舟盛りに酔う初夏の旅

房総鋸南町　佐藤　浩子
浜風に母と佇ちし日ぜんな汁

本佐倉城　小野富美子
秋草の揺るるは武人のさざめきか

流山市おおたかの森　窪田　俊作
森一つ消えハロウィンがやってきた

八街市　川島　里子
落花生茹でて美味なるおおまさり

千葉城　長井　寛
天空に届く千葉城春の文字

印西市千葉ニュータウン　高橋　節夫
子燕や千葉ニュータウンとのぐもり

房総半島　高橋　健文
房総の臍のあたりの寝待月

千葉寺　徳吉洋二郎
「野球」と書いて「朗希」と読む千葉笑い

誕生寺　髙久　清美
散華冷ゆみほとけ有情の眉開く

小金本土寺　髙橋　公子
曇天の日の紫陽花は無口がいい

南房総野島崎　直江　裕子
水仙の系図いちばん上は海

館山市の里見城　鈴木　房州
空一杯鯱鉾が吐く鰯雲

豊砂新駅　無　子
南風吹く豊砂新駅からピアノ

南房総白浜　田沼美智子
百手火におよぐ白衣海女まつり

野田市こうのとりの里　岡田　春人
こうのとり一本脚の秋の夢

関宿　田村　隆雄
関宿の差配江戸へと春の川

市川真間山弘法寺　高桑婦美子
ものがたる伏姫桜空にあり

香取市　側高神社　鈴木まんぼう
髭撫で祭りダリにも負けぬ髭漢

長狭千枚田　田端　重彦
目借時四方より迫る千枚田

京葉線幕張豊砂駅近辺　杉山真佐子
馬加の海夏の日の砂豊か

千葉公園　高木　一惠
まほろばの浮葉立ち葉や大賀蓮

銚子　鈴木　一行
葭切や坂東太郎真っ平

富津　富澤さち子
三世代こえて富津の潮干狩

浦安　菅ノ谷文子
春の海嬰と行きたしＴＤＬ

市川市　武田　伸一
花を見て地獄絵を見て下総なり

鋸山　津髙里永子
曼珠沙華鋸山を下り果てば

北総　戸邉　光一
北総に官幣大社五月晴

・「髭撫で祭り」は毎年一月に香取市側高神社で五穀豊穣と子孫繁栄を祈る八百年続く奇祭。相手が髭を撫でた分だけ飲まされ酒豪を競います。
（鈴木まんぼうさん句より）

・長狭平野のふもとにある鴨川大山千枚田は、３７５枚の棚田があり、「日本の棚田百選」にも選ばれています。日本の原風景のような田園が広がります。
（田端重彦さん句より）

私の感銘句

	作者名	号	頁
多胡たかし			
ため息を吐きたる後の冬の蝶	髙橋	健文	144 4
なにか炊く醤油の匂ひ浦祭	安井	三緒	145 8
生き死にを時には思う桜の夜	中村	冬美	145 9
穏やかな波に島浮く遍路道	津髙里永子		145 10
で虫の分だけ傾ぐ夜のシーソー	中根	文子	145 10
映る雲映らぬ世相代田水	中山	皓雪	146 2
水切りの石母の日の男の子	柳本	ゆみ	146 2
葉桜や蛇口の光る新校舎	松岡	節子	146 3
農夫逝くこの万緑の風の中	福田志津子		146 5
銀河濃き村に涙を置いてくる	石井紀美子		147 6
農夫逝くこの万緑の風の中	**福田志津子**		
生涯を農業にささげ、その直向きで誠実なお人柄から篤農と呼ばれ多くの人々から慕われた方と拝察いたします。吹き渡る緑の風の中天寿を全うされた温顔そして刻まれた皺までも見えるようです。中七に作者の思いが伝わります。私事ですが山畑を守り耕した父と兄がそれぞれに緑の季節に旅立ったことを思いました。			
菅ノ谷文子			
枯葉一枚枝を離るる殺気かな	椎名	鳳人	144 3
体内の音入れ替わる冬はじめ	佐藤	禎子	144 3
一瞬の椿のためらい見てしまう	直江	裕子	145 9
格差とは無縁さくさく春キャベツ	永妻	和子	145 9
夜を纏ふ淵のさくらの黄泉明り	野口	久	145 9
銀杏散る千年の闇脱ぐように	中村	直子	145 10
十薬は遠近法を知りつくす	山口	彩子	146 3
万葉の歌の心や合歓の花	実籾	繁	146 4
釈迦の手に心あずける冬の蝶	岩岡	方子	147 5
銀河濃き村に涙を置いてくる	石井紀美子		147 6
田沼美智子			
この街に降れば汚れてしまう雪	鈴木	一行	144 3
霜柱踏んで我が身の軽さ哉	橋口	久子	144 6
蘖や生き抜くすべを戦禍地へ	新澤	誠	145 8
白蝶の来て軽やかに鳴るピアノ	戸邉	光一	145 10
ときめきの角度に足らぬ夏帽子	松本	千花	146 3
生き伸びる為の芸なり羽抜鶏	実籾	繁	146 4
花種を蒔く戦争の終るまで	渡辺	澄	147 5
蟷螂の蹴られて女性専用車	蛭名	節昌	147 5
六角レンチ囮は微動だにせず	秋尾	敏	147 6
夕木槿母の戦を地に還す	飯島	昭子	147 7
小川トシ子			
花束となるは眠たし霞草	玉山	政美	144 4
春泥を口笛で跳ぶスニーカー	前田	孝子	144 5
流氷期面会謝絶のドアが開く	長濵	聰子	145 8
紅梅の半分見えて五分うれし	永井	奈々	145 9
八月のさみしき遊び缶を蹴る	徳吉洋二郎		145 10
ちちははの触れたと思う白梅よ	森村	文子	146 3
十薬は遠近法を知りつくす	山口	彩子	146 3
死ぬという普通のはなしりんご剥く	山中	葛子	146 5
本心をききたいけれど心太	森須	蘭	147 4
花種を蒔く戦争の終るまで	渡辺	澄	147 5
山口　彩子			
寺山修司と訛り同じく蜆汁	武田	伸一	144 3
憲法九条太刀魚はぶつ切り	長濵	聰子	145 8
潮の香のほのと房州うちはかな	中村	博子	145 9
ちちははの触れたと思う白梅よ	森村	文子	146 3
善人はなべて不自由さくらんぼ	横須賀洋子		146 3
大仏や目を伏して聞く春の潮	林	みさき	146 4
明日が見えるはずもなくももさくら	山崎	聰	147 4
使いずてとは永遠にマスクなり	渡辺	澄	147 5
メビウスの帯切れ夫は夏空へ	伊藤	希眸	147 5
六角レンチ囮は微動だにせず	秋尾	敏	147 6
寺山修司と訛り同じく蜆汁	**武田**	**伸一**	
寺山修司と云えば少し明るい表情のグラビア写真が思い出される。同じ年代の私は、若くして注目され、俳句、短歌、演劇等、前衛的なものの活動の担い手としてまぶしいような存在だった。だが晩年は幸せとは云えなかったように思える。武田氏も訛り同じくとあらば東北の方、その思いも大であろうか。それにしてもいつ迄も印象に残る人ではある。			
小林　実			
噴煙はおまけ苺の色違い	鳥取	芳子	145 8
梅雨の月あなたのダサい服たたむ	陸野	良美	145 8
憲法九条太刀魚はぶつ切り	長濵	聰子	145 8
夏草を刈って巨大になる鼻孔	戸邉	光一	145 10
冬の靄ビルは発射の構えして	羽村美和子		146 2
善人はなべて不自由さくらんぼ	横須賀洋子		146 3
マスクごと外して使ひ捨ての顔	宮本美津江		146 4
たった今を忘れています凌霄花	山中	葛子	146 5
田仕舞や風に吹かれている男	村田	珠子	147 4
亀鳴くやかなしみは人に残りて	渡辺	澄	147 5

澤田　寿一

愚痴はもう品切れですよ日向ぼこ　鈴木まんぼう　1443
不揃いのおにぎり勤労感謝の日　椎名　鳳人　1443
半径を短かく暮らし落葉踏む　関谷ひろ子　1458
顔上げて語るふるさと野の兎　永妻　和子　1459
無言という音あり冬銀河あり　徳吉洋二郎　1510
踏みだせる義足に力春隣　八島　岳洋　1462
単線や囀りはさむ文庫本　星野　一惠　1464
百幹の脈打つ音や夏きざす　宮下　奈緒　1465
母と来て小さないびき河鹿宿　森井美恵子　1474
考へるものは弾かれ蟻の道　浦野　五郎　1475

山中とみ子

くしゃくしゃに男泣きする大嘘　椎名　鳳人　1443
星呼び込んで鬼の豆一つかみ　倉岡　けい　1444
人生にふたたびはなし落椿　高橋由紀子　1446
木々芽吹くダム湖の空を賑わして　浪本　恵子　1459
少しずつ老い新緑のまたたく間　野口　京子　1459
踏みだせる義足に力春隣　八島　岳洋　1462
九条を女説くときレモンの香　吉野　精　1462
水音を逸れたる水を四十雀　保坂　末子　1464
罠かけてわなにはまる子草青む　山中　頼子　1475
泪から明日が見えるソーダ水　石井紀美子　1476

森井美恵子

ため息を吐きたる後の冬の蝶　高橋　健文　1444
かるた取り負けた児が行く母の膝　原　悦子　1445
天道虫付いて行けない宇宙論　重田　忠雄　1446
塗り残した白いところが春愁　直江　裕子　1459
顔上げて語るふるさと野の兎　永妻　和子　1459
人声の垂直に来る寒さかな　徳吉洋二郎　1510
飛鳥山の桜は長い手紙のよう　永井アイ子　1510
宝船辺野古の海は見ない振り　並木　邑人　1510
失敗談ふくらんで案山子の臓器　柳本　ゆみ　1462
ときめきの角度に足らぬ夏帽子　松本　千花　1463

川上　典子

海底の戦艦如何に黍嵐　荒木　洋子　1443
言葉からひとは壊れる石蕗の花　下村　洋子　1443
淋しさの底に触れたか浮いてこい　玉山　政美　1444
大小の呪文を空へ石鹸玉　杉山真佐子　1445
半径を短かく暮らし落葉踏む　関谷ひろ子　1458
心してささくれ立つを耕せり　永妻　和子　1459
秋は窓際カフェラテのMサイズ　富澤さち子　1459
燕待つ今日をつむいでゆく言葉　藤田　富江　1465
隠元を初めて茹でる腕時計　上杉　良身　1475
銀河濃き村に涙を置いてくる　石井紀美子　1476
心してささくれ立つを耕せり　永妻　和子

心身ともにささくれ立つコロナ禍の状況。そのささくれを、心して、つまり丁寧に均らして自分を取り戻そうとしている、と読み取りました。「耕す」という表現に、しっかりと自分と向き合っている作者の真摯で前向きな姿勢が感じられ、ひとつの生き方を教えられた思いです。

長濱　聰子

わたくしが老婆だなんてスイチョン　鈴木まんぼう　1443
雲の峰なんだかイチローの背中　武田　伸一　1443
春愁やぶれる我が身の座標軸　前田　孝子　1445
竹林の風の隙間の百千鳥　橋口　久子　1446
カサブランカ副反応に軽い恋　羽村美和子　1462
九条を女説くときレモンの香　吉野　精　1462
白魚網雲こぼしつつ引き上げる　馬渕　津枝　1462
げんげ野に遊べ毀れゆく母よ　細根　栞　1464
死ぬという普通のはなしりんご剥く　山中　葛子　1465
雲にカリヨン晩秋の引用符　秋尾　敏　1476
わたくしが老婆だなんてスイチョン　鈴木まんぼう

スイチョンは〝馬追い〟の鳴き声。馬方が馬を叱咤する舌打ちの音に似ているところから、この呼称がついたと歳時記にある。

前髪を眉の上で切り揃えたオカッパ頭の活溌だった頃の自分。三つ編みをしたふっくらした乙女の頃。初々しい新妻の頃の匂やかな私……と長い人生を歩んで来た自分の姿を辿り、ふと鏡中の現実の自分と出会う。

〝チェッ〟という舌打ちの音が聞こえて来そうな一句。

馬渕　津枝

言葉からひとは壊れる石蕗の花　下村　洋子　1443
狐火に呼び止められしまま不明　泉　志眞子　1443
パンドラの箱のどん底が三月　長濱　聰子　1458
八月のさみしき遊び缶を蹴る　徳吉洋二郎　1510
花びらが相乗りしてるベビーカー　馬場　馬子　1510
善人はなべて不自由さくらんぼ　横須賀洋子　1463
点滴がくるわず月の夜を刻む　山中とみ子　1463
人間をやめる日ふくろうになる日　細根　栞　1464
硯海に足すかなかなの雫かな　石井紀美子　1476
敗戦日鳩の出て来ぬ鳩時計　東　國人　1476

津田沼研究句会報告

●第三六五回（令和五年二月十四日）
（於：津田沼一丁目町会会館）
司会　鈴木　瑩子

春寒し孤独なビルの窓あかり　村上　澄子
今朝発すはじめの会話細雪　鈴木　瑩子
梅一輪疼きはじめる去年の疵　池田　博臣
さりげなく祖国といへば暖かし　増田　豊子
春一番もつれる足よアンダンテ　なかもと淑子
名も知らぬ小犬寄りくる冬の昼　股野　久子
つらつら椿琴の音聞こゆ想夫恋　長井　寛
如月や卵白かたく角を立て　星野　一惠
春近し償えぬ罪鵙の声　白木　暢子
様式は序歌をむさぼる遠き火事　並木　邑人
眉高く跳び箱越えて麦踏んで　高木　一惠
かれ二人河津桜のサト子さん　吉野　精
餅花抱き黒き柱の息づけり　栗原　正子
天国に裏口ありや兜太の忌　徳吉洋二郎
さくらちるちる面白かったと言いなさい　小林　実

●第三六六回（令和五年三月十四日）
司会　徳吉洋二郎

上野発掌中春の海を持ち　小林　実
啓蟄や人も出そうかぺろり舌　栗原　正子
春が行く雲の翳りを走らせて　星野　一惠
行き止まり多き家並や花はこべ　股野　久子
防潮堤超える高さの紋黄蝶　池田　博臣
菜の花や老々介護乳母車　村上　澄子
思ひ出はあまた彼岸へ春がすみ　高木　一惠
あたたかやハシビロコウに同居人　鈴木　瑩子
忸怩なんぞ涙湖に沈めきぶしの金　並木　邑人
里山と里海繋ぐ千葉の春　増田　豊子
花曇り子ども歯医者に阿鼻叫喚　なかもと淑子
それぞれにさては菜の花忘れ去る　白木　暢子
黄砂降る風船爆弾飛ばそう　徳吉洋二郎

●第三六七回（令和五年四月十一日）
司会　長井　寛

句会三十年句句の堆積山笑う　栗原　正子
行く先は機関車任せ百閒忌　長井　寛
朝靄の花には触れず中空へ　高木　一惠
数え唄だれかの歌う花の夜　池田　博臣
東京の拑堝をのぞく春爛漫　鈴木　瑩子
母よ今日は菜飯二杯を腹に入れ　小林　実
風はらむシャツまぶしかり春一番　股野　久子
「野球」と書いて「オオタニ」と読む四月馬鹿　徳吉洋二郎
花びらをよけて真鯉の無精ひげ　村上　澄子
とつおいつ時間を食し蘖ゆる　並木　邑人
仏壇の父へ娘の桜餅　増田　豊子
落ち椿赤々歌姫の絶唱　なかもと淑子
八街の産む竹の子の明らかさ　白木　暢子
地虫出づお前も方向音痴かな　星野　一惠

青葉研究句会報告

●第一三七回（令和五年一月二十六日）
（於：千葉市民会館）
司会　並木　邑人

首脳会議長い廊下の寒気団　長濱　聰子
人の名の海馬に沈む着膨れて　越野　雄治
残生の重さに耐えてしずり雪　池田　博臣
春ともし老いを繕う糸長く　加藤　法子
長っ尻与太話湧く年の酒　栗原　正子
河豚食って長生きなんて安本丹　徳吉洋二郎
雪女郎黒衣乱して万代橋　横山　郁子
大寒や上野の杜の地獄門　矢野　忠男
独り居の居間に長居や寒の雨　山﨑　幸子
葉牡丹の渦どこからも受け入れず　石井紀美子
一塊の芥とらへり初明り　森井美惠子
行く年や手帳の中の嘘ひとつ　鈴木まんぼう
朝な朝な長姉火焚鳥を呼べり　並木　邑人
白杖のつえ生きていて冬銀河　加賀谷秀男

●第一三八回（令和五年二月二十三日）
司会　長井　寛

髪切るやひな人形は空をとぶ　森井美惠子
糸遊や橋脚欠伸かみ殺す　並木　邑人
フランスパンの切口の余寒かな　池田　博臣
雪焼けし八十路間近のご帰還か　横山　郁子
わらふ山の懐に伸ぶ沈下橋　越野　雄治
浮橋に風の機嫌や桜咲く　石井紀美子
昭和の雪住む人ありし橋の下　栗原　正子
継橋の三歩に余り梅ぽつり　矢野　忠男
うつしよの喜怒哀楽てふ春の泥　長井　寛
遠き日の桟橋に立つ父の春　山﨑　幸子
涅槃西風いつか渡った橋がない　長濱　聰子
橋脚の螺子冷え冷えとして光り　加賀谷秀男
整列の苦手なボクよ葱坊主　鈴木まんぼう

●第一三九回（令和五年三月二十四日）
司会　矢野　忠男

料峭やつなぎ合ってるシャツの袖　森井美惠子
春暁の般若心経空耳か　池田　博臣
鷹鳩と化し善光寺めざしけり　鈴木まんぼう
難解な長編小説春の泥　横山　郁子
空想の好きな少女よ春の雪　石井紀美子
空の渚に春月のオーバチュア（序曲）　長濱　聰子
胛に翼の生える春の風　長井　寛
ミサイルに要注意せよ燕の子　山﨑　幸子
時空越え泉に憩ふ夜毎の我　栗原　正子
天空に間もたせぬ桜かな　矢野　忠男
小窓より神父の覗く花明り　越野　雄治
春の地震通信切れて闇の渦　加賀谷秀男
性懲りも無き追従や原発忌　並木　邑人

柏研究句会報告

●第一二四回（令和五年二月十一日）
司会　長井　寛

きさらぎの夜のひろがりを抱きしめて　下村　洋子

立春やつねと変わらぬ物を食ふ　岡田　春人
声色という浪漫あらせいとう　木之下みゆき
越境の気球ふわふわ春の謎　佐藤　鈴子
雪晴やあいやあいやと山の哭く　椎名　鳳人
行く年にうんざり来る年にデジャビュ　藤好　良
青空の青になりきる寒卵　橋本志津子
除雪車の行く手はるかに白い闇　中里　結
春めくや廻し始める自分軸　川上　典子
混沌の渦巻くこの世雪となる　髙橋　宗史
花の兄を懐に抱き義士逝きぬ　長井　寛

●第一二五回（令和五年三月十一日）
司会　長井　寛

ふるさとは鍵のない空遠蛙　椎名　鳳人
春の夜や思わず真似るコショウ挽き　佐藤　鈴子
Cの入り口は朧視力検査表　木之下みゆき
平凡なわが人生に梅の花　岡田　春人
啓蟄や昨日を今日にぬりかえて　橋本志津子
三月のなにをやみくもに焦燥　川上　典子
仲見世の他国言語や四方拝　藤好　良
木の芽風岡こんもりと膨れけり　髙橋　宗史
花こぶし自負をはらりと解き放つ　下村　洋子
胛（かいがね）に翼の生える春の風　長井　寛

●第一二六回（令和五年四月八日）
司会　長井　寛

黒髪に触れる初蝶昂れり　野口　京子
菜の花のまどろみに似て死もありぬ　下村　洋子
飛花落下いつの間紛れわが吐息　佐藤　鈴子
春炬燵猫は見ている聞いている　岡田　春人
始皇帝と草餅つなぐ点と線　木之下みゆき
オータニの先制バント蝶ひらり　藤好　良
行く春をキルトの針が追いかける　川上　典子
山里の詩歌奏でる雪しずく　長井　寛

君津研究句会報告

●第三十三回（令和五年一月五日）
（於：君津市生涯学習交流センター）
司会　並木　邑人

戦争がはるか死角に初御空　長濵　聰子
ひたすらな獣の寝息冬銀河　長井　寛
冬うらら胸の閂少しずれ　前田　孝子
産土の浜へ帰ると泣く浅蜊　古賀　壽昭
初御空北山杉に迷いなし　山田たかし
佳き日へと四捨五入する年の暮　鈴木　美幸
スカジャンも過客の一人空っ風　泉　志眞子
老ゆるとは闘志無きこと冬薔薇　羽矢　眞人
猪鍋の冷めてまだ来ぬ人を待つ　馬渕　津枝
梟や夕べ富山の薬売り　加藤　法子
百歳の脳に令和の種を播く　村田　満枝
雲無くて柚子一片の澄まし汁　越野　雄治
たっぷりと愛されし日々ちゃんちゃんこ　石井紀美子
虚空舞う夢を抱きて蝶凍てる　森　孝子
空画の降り積む半紙雪ばんば　並木　邑人
昏睡は空空虚空息白し　田沼美智子
帝釈天若水ふふむ寅虎トラ　徳吉洋二郎
庭に見て雲間に出し今日の月　金澤　惠子
新築の榾積む家や石蕗の花　小澤　富子
内職や三寒四温の音立てて　佐藤　鮎美

●第三十四回（令和五年二月二日）
司会　越野　雄治

酔い醒めて枯野の月を置いて去る　山田たかし
褞袍の男まごとのような犬連れて　村田　満枝
聖戦という寸法ありや鬼やらい　長井　寛
揺るぎなき平和憲法冬の富士　徳吉洋二郎
夕星や枯野の果も枯野なり　馬渕　津枝
法灯のかすかに揺れて雪女郎　前田　孝子
哲学する剣法裸木に挑む　並木　邑人
母描きし略図謎めく花柊　越野　雄治
憲法を根ほり葉ほりと獺祭り　泉　志眞子
日向ぼこおっと危ない法律論　加藤　法子
生きるのに法が多すぎ成人祭　田沼美智子
鼓鼓（ここ）と法鼓のひびき春立てり　森　孝子
ていねいに手を添え広ぐ初日記　鈴木　美幸
朋友の緩和治療春の雨　古賀　壽昭
節分や法被姿の家電店　小澤　富子
雪嶺の如き刃文や刀鍛冶　羽矢　眞人
梅いちりん法筵の窓透きとおる　石井紀美子
舞い澄める独楽の法悦フィギュアスピン　長濵　聰子
父母の分までいたす歯固めや　佐藤　鮎美

●第三十五回（令和五年三月二日）
司会　並木　邑人

ストレスの溜まり場に置くさくら草　泉　志眞子
亀鳴くよ癒える兆しの失語症　田沼美智子
自由とは痛みあるもの春浅し　鈴木　美幸
春愁を形見の衣に畳みけり　前田　孝子
溜め息に影のありけり寒牡丹　越野　雄治
おもいっきり淋しさ投げる鬼やらい　石井紀美子
水溜りひょいと跳び越え農具市　加藤　法子
春立つ日鉛筆二B五年生　吉野　精
積ん読のちらり目に入る菜種梅雨　小澤　富子
頭髪のたんぽぽの絮父似かな　古賀　壽昭
つくしのほうし溜めてやがて風来坊　馬淵　津枝
磨かれし窓や裁つ人春を生む　山田たかし
桃の花ゆったり休む紙飛行機　村田　満枝
春の風宝を溜める秘密基地　佐藤　鮎美
多喜二の忌築地に大きな水溜り　徳吉洋二郎
溜水をのぞきに来る子春の雪　森　孝子
おぼろ曳く地球「ヴィオロンの溜め息」　長濵　聰子
溜飲は下がらず眼泛く干潟　並木　邑人
デジャービュのわらんべの浴ぶ春の泥　長井　寛
下萌ゆる十七文字の句碑の径　羽矢　眞人

強化部だより

初心者講座開講！

4月15日千葉市生涯学習センターに於いて、待望の初心者講座が開講された。受講生は6名。全くの初心の方、基礎を学びたい方、新しい俳句を目指したい方と、目的は様々であるが受講生の熱い思いが伝わって来る。都合でお子さんを連れて来られた方もあり、開講の挨拶に来て頂いた並木邑人会長が、その後サポートして下さった。子育て中の女性にも開かれた講座となり、嬉しいことである。

現代俳句協会発行「始める！　俳句」と羽村美和子講師手製のテキストに沿って、基礎知識を学びつつ十七音の世界に踏み込む。言葉による新しい世界を発見する楽しさを、体感してゆく。興味のある方、途中参加も歓迎。

仲直り朗ら朗らと柏餅　萱原　泰子
春惜しむゆっくりと巻くオルゴール　宮原　青佳
草笛のとぎれとぎれは誰の吹く　山﨑　幸子
三の糸切れしまんまに吊忍　矢野　忠男
句につられ二時間先の藤の花　荻野由美子
さくらんぼ少女期揺れて少しいびつ　栗原　正子

三月あしたば句会

地図上の日帰り旅行蝶の昼　陸野　良美
斑雪クロスワードのタテが好き　遠藤　寛子
朧月ふと沸きたちて伊賀甲賀　無　子
常温の水売っており養花天　三宅たくみ
黄水仙夢の出口かも知れない　羽村美和子
恋はいいから春をください普通の春　松本　千花
卒業の花束かおる地下鉄に　青野　友香
春場所や新型コロナ押出しぬ　徳吉洋二郎
痛覚を弄ぶ水青鮫忌　並木　邑人
沈丁花黄泉の闇へと誘う風　矢野　忠男

青年部句会は愛称があしたば句会ときまりました。次回は七月の開催となります。夏雲システムによるインターネット句会です。参加希望の方はご連絡ください。Kokomiya2003@yahoo.co.jp（青年部・三宅）

五月あしたば句会吟行

五月九日千葉公園にて行われました。つつじはすでに終わっており芍薬も散りかけていましたが、初夏の好天に恵まれ新緑やあやめなど存分に楽しみました。LINE参加の一名を加え七名での句会となりました。

掻き寄せて蹴っ飛ばす雲ああ若夏（うらなつ）　並木　邑人
咲き待てる牡丹の御名白翁殿　石井　浩美
コロナ禍明けました薫風の荒木山　無　子
言の葉に青葉の共演しなやかに　高橋　宗史
花牡丹ひとり五枚のお花紙　遠藤　寛子
芍薬の落花狼藉救急車　矢野　忠男
王墓にもありや矢車草の青　三宅たくみ

図書紹介

■ **句集「愛惜」　山中　葛子**
令和五年三月七日刊　文學の森

屈葬のはるかな湿り赤まんま
自分史のツルウメモドキを引っぱって
愛惜を荷作りせよと虫そぞろ

■ **句集「母情」　椎名　鳳人**
令和五年四月四日刊　現代俳句協会

母情の荷縄ぶつぶつ切って風光る
火を焚いてみんな独りで生きている
花野夕焼葬るも抱くも許されず

《会員・会友の近況》

・リフォームの予定をしていますが、断捨離がなかなかはかどりません。（佐藤　直子）

・少し頑張りすぎてお産以来初めての入院。今年一月八十歳となり、毎日をゆっくりと大切に過ごしたいと思うようになりました。俳句も焦らず楽しみます。（岡山　敦子）

・「現代俳句千葉」とは吟行を通じて親しませて頂いています。現下の中で直に史跡や風景に触れ、作句することの喜びを感じています。（島　隆史）

・「千葉を詠む」愉しい企画をしてくださりありがとうございます。八十代半ばに入り皆さんのお句を見せて頂くことが楽しみです。（佐藤　浩子）

・今思うこと。この足で一生歩き続けたい。また、正しい姿勢を維持し（内臓を守るためにも）転ばぬよう、栄養のバランス、簡単な体操をほどほどに楽しみながら続けたいと思います。（川島　里子）

・八重洲ブックセンターの一階にいくつかの俳句結社誌のコーナーがあった。一九九一年近所の画廊で油彩展をやっていたので、出かけたりした。同じ画廊での写真展に伊丹三樹彦ご夫婦がいらしたりしていた。当時買った馬酔木創刊七〇周年記念の表紙絵は安井曽太郎（写真）寄稿者に大岡信など。（高橋　節夫）

・只今家事奮闘中!!　句会への参加もままならず、句会へ出ないと作句にも力が入りません。（徳吉洋二郎）

・イオン・コッドレスク氏の講演を聞きました。書き尽くす西洋絵画と余白の美の俳句、私は余り混同したくないと思いました。特にブリューゲルは個人ではなく工房の作品。私は俳句が忙しくなる前まで毎年、百号を上野に出品していました。（髙久　清美）

・心身共に元気です。ＮＨＫ学園の俳句講座の講師続けています。（直江　裕子）

・コロナ禍も三年に。今度は食糧難になることが予測されるとのこと。コオロギ食を推進する企業も出てきたが、イナゴや蜂の子と違ってこれは危険。寄生虫やボツリヌス菌を持っていて食べられません。全く変な世の中になりました。（鈴木　房州）

・人生で一番忙しいと窮地を嘆くと先輩諸姉から「五十代は寝る暇もなくて当たり前」と。畏れ入ります。六十まであと二年。（無　　子）

・車のない生活を良しとしています。ゆっくりゆっくり歩いています。（田沼美智子）

・コロナ禍でこもっているのに風邪をひき、いよいよ老年、ますます老齢と自分の現在に思いをいたしております。（高桑婦美子）

・四年前、左股関節の手術をしましたが、他に背骨と膝関節変形のため、短距離を歩くのがやっとです。三十年以上出かけていない、ディズニーランドやディズニーシーに孫と出かけるのが夢です。（菅ノ谷文子）

・七十五歳から自信が過信になると思い三千米級の山から軽登山に切り替えました。妻との寺社巡りは今年で三十回目。家康ゆかりの静岡・愛知・岐阜の城など廻りました。時間のある時は家庭菜園です。（田端　重彦）

掲示板

《会員・会友異動》

●退会（会員）平山千楊、大薗智子
藤井稜雨、小池美佐子
高野礼子、高橋富久江
藤岡尚子、山中とみ子
（会友）金澤恵子、安念俊彦

●新会員
寺田　勝子（会員）秋尾　敏紹介
土井　探花（会員）水野二三夫紹介
宮　たかし（会員）水野二三夫紹介

《令和五年度第二回幹事会》

日時　令和五年五月二十三日（火）午後一時
場所　船橋市勤労市民センター
議題
一、令和五年度総会・俳句大会、会計報告
二、中山法華経寺界隈吟行会結果・会計報告、秋の吟行会について
三、一般社団法人現代俳句協会（本部）の動向について
四、各地区総会・俳句大会について
　神奈川・多摩・都区出席者
五、青年部の活動報告→強化部
六、初心者講座について
七、会報一四九号について
八、各研究句会の状況について
九、その他
　①令和五年度後期・令和六年度前期予定について
　②会員・会友動静
　③次回幹事会（八月二十二日）
　④その他

□□事務局・編集部だより□□

●現代俳句協会が一般社団法人化されましたが、各地区の現代俳句協会は今まで通り任意団体のままで、それぞれ独立の団体となりました。

これにより、四月以降新たに会員になる場合の申込用紙が従来のものを少し変更したものになりました。必要な方、推薦人になられる方は左記事務局へ用紙を請求してください。

０４-７１６１-１６３９　岡田春人まで

●千葉県は寺社が多い県として知られ、県内に寺院３０１５、神社３１８７もあるそうです。その名刹中の名刹、中山法華経寺へ吟行。三年半振りに通常の吟行句会が開催され、み仏や青葉の薫風に、皆様の力作にと心が癒されました。

●第60回現代俳句全国大会への作品応募は、7月31日締切です。奮ってご参加ください。

現代俳句千葉　第一四九号
令和五年六月一日発行

発行人　千葉県現代俳句協会
会長　並木　邑人

現代俳句千葉編集部
〒278-0037　野田市野田
六七七-一-A二二五
木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局
〒277-0084　柏市新柏二-十三-六
岡田　春人
TEL・FAX　〇四-七一六一-一六三九